

考古学からみたヤマトタケル伝承

概要 建国物語の英雄として語り継がれたヤマトタケル、その研究と評価は史学・文学などで様々な議論があります。近年、宮城・岩手の県境で、古墳時代前期後半(西暦350年頃)の近畿の文化を包蔵した砦あとが発掘調査され、ヤマトタケルの東征伝承を彷彿とさせる成果が注目されています。ヤマト王権はなぜ東北まで進出したのか? 弥生時代末から集団の移動とモノの交流を検討、考古学からみたヤマトタケル伝承の新研究を紹介します。

日時:2022年12月17日(土)14時~

配信:日本大学通信教育部からリモート開催

発表者:西川寿勝



続縄文土器(宮城県石巻市新金沼遺跡)

栗原市入の沢遺跡



7

焼き討ちされた砦

- 報告書の刊行により、非常に特異な様相の集落が判明。
- 丘の上に営まれた集落の周囲は、岩盤を掘って造った大溝で囲まれ、その幅は2~4m、深さは0.7~1.5m、住居の地面と溝の底との高低差は最大約4mに及んだ。
- 総延長約380mの規模となる大きな集落。
- 大溝の内側は木の杭が城壁のように密に打ち込まれ、内部が見えないように。城壁の外側は掘った土で土手を造っていた。
- 40棟近くの竪穴住居あり、大半は焼け落ちていた。
- 試しに発掘した5軒の焼失住居中、3軒から4面の銅鏡が発見された。これだけでも古墳時代の鏡の北限を塗り替える大発見だが、通常は古墳からみつける威信財が、辺境の住居にあったので驚かれた。
- 鏡には水銀朱が付着。不純物として混ざる硫黄の同位体分析から、三重県の丹生鉱山産の朱とわかった。

8



9

空堀と柵に囲まれた集落



10

- 入の沢遺跡は部分的な試掘調査だけで大騒ぎになり、道路計画は変更されて国が用地を買収。
- 現在は史跡になって保存。その結果、集落は全面発掘されなかったため、全容は不明。

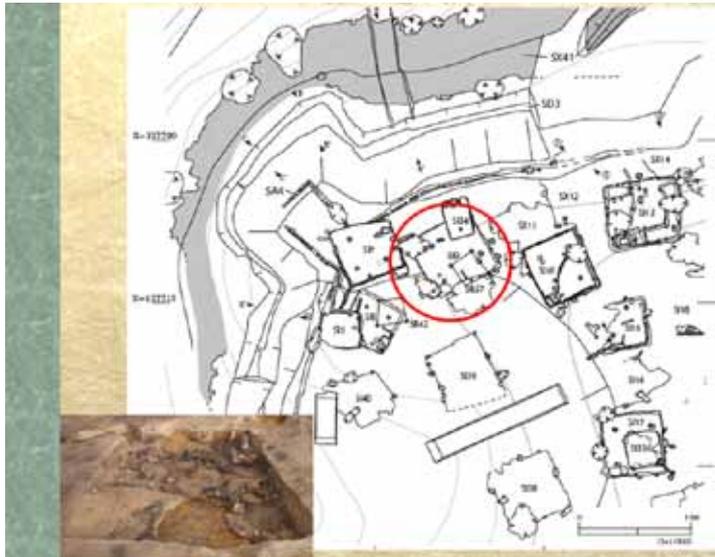


11

空堀と柵列



12

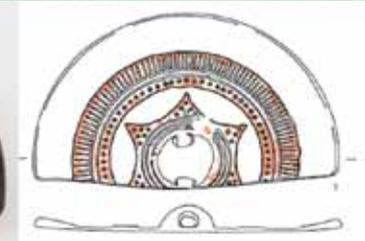


13



内向花紋 (ないこうかもん)鏡

・付着した朱を硫黄同位体分析した結果、三重県丹生鉱山の水銀朱と判明。



14

豪華な出土品

- ・鉄器は30点以上出土。斧・鋤先・剣・刀子・矢じりなど。
- ・鉄斧のうち1点は布にくるまれて壺からみつけた。柄をつけた道具ではなく、未使用の素材。鋤先もまとめて縛られていた。
- ・装身具の玉類は一つの住居から圧巻の264点が出土。
- ・勾玉・管玉・ガラス玉などで、多様な素材。
- ・当時、ガラス加工は普及しておらず、中国製か朝鮮半島製。出雲の水晶・北陸の碧玉・南関東の滑石・佐渡の碧玉など。
- ・竪穴住居から玉類が出土すること自体、大変珍しいことだが、これまでの例と比較して断トツの数と種類。
- ・特異な滑石製品が複数あり、群馬県高崎市下佐野遺跡で工房がみつかった。
- ・その他、千葉県成田市などで産出する南関東産の滑石製管玉も数多くあり、玉類は各地の製品の寄せ集め。

15

剣・小刀・矢じりなど



16

板状鉄斧

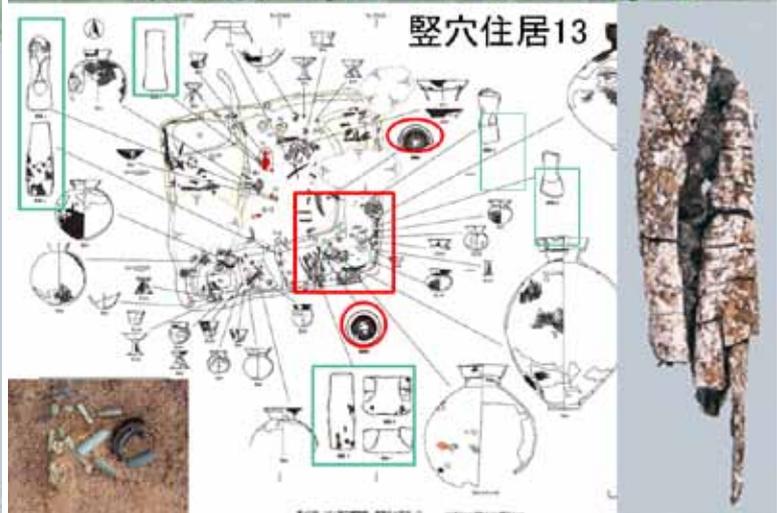
・鉄斧は柄がついておらず、未使用。素材としての流通。



17

焼失住居からは人骨も

竪穴住居13



18

豊富な玉類



19

ヤマトタケル東征の実態?

- ・集落は外部からの襲撃で、大半の住居が焼かれ、家財をもって逃げる間もなかったと推測。
- ・住居からは人骨も。多数の人々が殺された可能性も。
- ・そもそも、辺境の集落の人々が大型古墳の副葬品にあるような鏡・鉄器・玉類などを持っていたことが問題。
- ・集落はヤマト王権の東北進出の実例であり、出土品は蝦夷を恭順させるための下賜品、または交易品か。
- ・奇しくも年代的に、ヤマトタケル一行が『日本書紀』にある日高見国の蝦夷を平定した伝承を彷彿とさせる。
- ・住居内からは多数の土器も発見された。壺の中にコメがあり、焼かれて炭化米になったものも。現地ですでに、コメづくりされていたかどうかは微妙。
- ・土器は近畿の土器ではなく、現地の土器でもなく、安房(千葉県南部)と推定された。つまり、集落の人たちは千葉県南部からやってきたということ。

20

焼けたコメと布留式土器



炭化米



21

3 近畿勢力の関東・東北進出

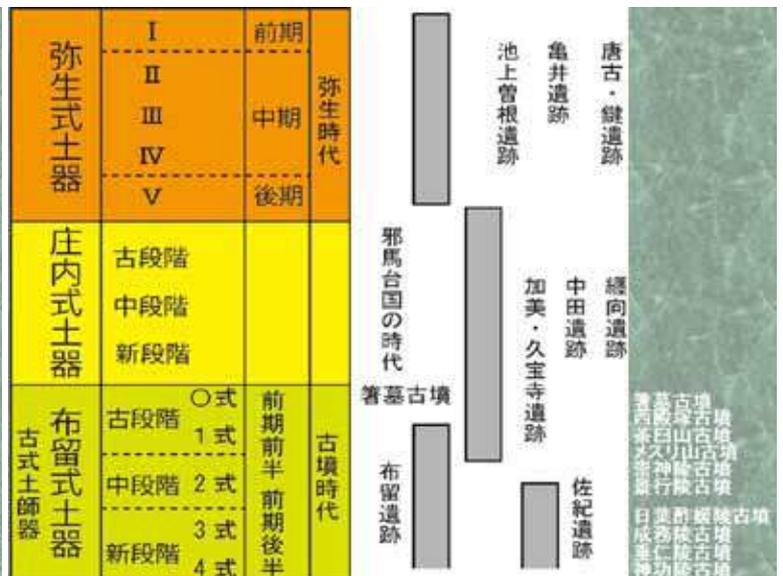
- ・考古学では、ときおり予想外の遺跡が発見され、それまでの研究がひっくり返ってしまう。しかし、入の沢遺跡のような砦の集落は、断片的に足取りがつかめていた。
- ・もとより、焼き討ちによって良好に集落内の実態が判明し、大型古墳の副葬品を超えるような豊富な資財があったこと、宮城と岩手の境まで達していたことは予想外。
- ・弥生時代は昭和12年に奈良県唐古・鍵遺跡の調査でみつけた土器をもとに、前期(I)・中期(II~IV)・後期(V)の五様式の土器編年が提示された。登呂遺跡・吉野ヶ里遺跡・板付遺跡などの全国でみつける拠点集落は、環濠をもち、前期・中期には石器を伴うものの、後期には石器がなくなる。後期になると一斉に鉄器時代に移行するとも推測される。
- ・興味深いことに、大半の拠点的な環濠集落は弥生時代の内に滅ぶ。それで、登呂遺跡などが弥生時代の集落として史跡整備できる。もし、古墳時代まで集落が続いて、豪族居館などに発展していたら、弥生時代の集落として史跡化はできなかった。

22

弥生土器・土師器の流通

- ・古墳時代になり、纏向遺跡など新たな集落が出現、土師器と呼ばれる専門工人がつくった土器に置き換わる。
- ・弥生時代までは集落の女性がつくる地域色の強い土器だったが、陶工が鉄の工具で規格的な土器をつくり、ひろく流通するようになる。
- ・近畿では最初に天理市の布留(ふる)遺跡で解明されたので、布留式土器と呼んでいる。
- ・弥生時代後期後半、近畿の土器は九州・関東・北陸に流通。…土器といっても、おこめを炊く炊飯器でカメ。
- ・形は近畿のカメでも、当地の粘土でつくったものもあり、集団の移動が伴う。
- ・人々が好き勝手に移動するのではなく、おおよそ移動したのは奈良の集団でも大阪の集団でもなく、神戸周辺の集団。…関東平野まで進出し、土師器の時代まで続く。
- ・弥生土器と土師器の間にもう一時期、庄内式土器が流行する時代があり、邪馬台国の時代にあたる。

23



24

弥生後期後半のカメの移動



25

庄内期の関東へのカメの移動



26

近畿の土器の東北進出

- 近畿の庄内式土器(限定的には神戸の)は北陸・中部・関東まで進出するが、同時に東海の土器も、関東・中部・北陸まで進出している。
- 関東平野では東海の土器をもつ集落と近畿の土器をもつ集落がモザイク状に分布。
- 近畿の庄内式土器が大量に発見され、移住や流通の拠点が、房総半島に3集落。千葉県戸張一番割(とはいちばんわり)遺跡・大崎台(おおさきだい)遺跡・中台(なかで)遺跡。
- その後、古墳時代前期の布留式土器の時代になると、さらに北に進出して茨城県・福島県・宮城県まで、分布が広がる。同時に、東海の土器も茨城県・福島県・宮城県、そして岩手県まで北進。
- ただし、人々が北へ移住する理由は不明。
- 福島原発の事故で、福島の浜通りの調査が滞っている。復興調査で、近畿の土器や東海の土器の北進がきめ細かく解明されると推定。

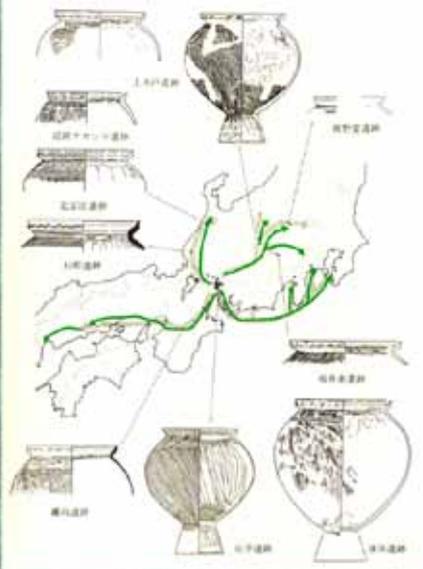
27



28

東海のカメの移動

※関東の庄内期は東海勢力と近畿勢力が集落ごとの土器でモザイク状の分布



29

東海勢力の関東移住

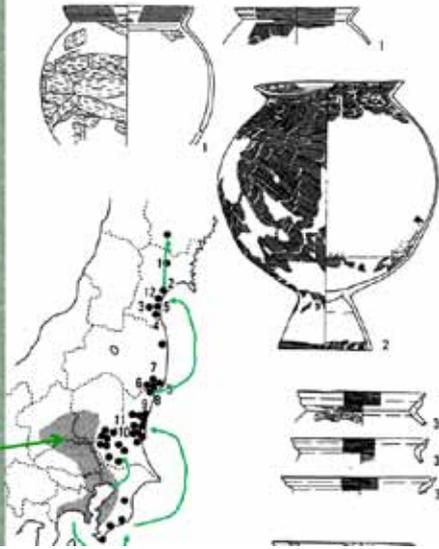
- 神奈川県綾瀬市神崎遺跡の集落では出土土器の9割以上が東海の土器。ただし、粘土は地元のもの。つまり、東海地域の人たちが移住して、現地で作ったもの。



30

東海勢力の 東北移住

東海のカメが
多数出土する地域



31

庄内式土器・布留式土器の創出地

・弥生土器と土師器の間をつなぐ庄内式土器はキビのカメの影響を受けていることがわかってきたが、発生源は姫路だった。神戸で普及し、淀川をさかのぼって京都に伝播する流れ、大和川をさかのぼって大阪に伝播する流れがあり、奈良盆地の纏向遺跡などの袋小路には遅れて入っていくことがわかった。…大和の発生ではなかった。

・同様に、古墳時代の指標になっている布留式土器は、石川県小松で創出され、近江から京都・奈良に伝播することがわかってきた。布留式土器のもっとも古いものは布留式土器と呼んで、箸墓古墳築造段階の土器とされている。ところが、これも大和の発生ではなかった。

・どうして、石川の小松が発生源かは未解明。近くに碧玉の産地があり、勾玉や管玉を生産している。北陸は石製品の大生産地。その技法は出雲とのつながりもみられ、鉄製工具を豊富にもっている。

・石製品は石川・富山・新潟を結び、新潟からヒスイも流通。

32

佐渡島の古墳時代化

- ・さらなる驚きとして、佐渡島の古墳時代化がある。
- ・佐渡の蔵王遺跡でも砦がみつき、建物に使われた部材の年輪を読んで年代を決定する方法で、ほぼ300年に伐採された部材だとわかった。ここでも中国鏡を模倣した近畿の鏡が発見された。
- ・なぜ、佐渡島が弥生時代を飛び越えて、古墳時代になるのか。ここでも、石製品の原料となる碧玉がとれるので、島の人たちは勾玉づくりなどを始めたからだった。
- ・佐渡の勾玉は対岸の新潟市の正尺C遺跡の砦の集落に運ばれ、上杉謙信の進軍ルートで群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川に至る流通ルートを形成した。ここでも東北の土器が発見されていた。
- ・逆に、入の沢遺跡でも佐渡の勾玉が出土している。

33

佐渡市 蔵王遺跡

- ・銅鏡のほか、銅鉄やガラス玉も。
- ・木製品の年輪年代測定で272年+α・288年+αの測定値。



34

南中台(なこんだい)遺跡・ 中台(なかで)遺跡



- ・千葉県市原市南中台遺跡では、竪穴建物2棟からまともな北陸南西部(石川・福井)系の土器が出土。
- ・このうち竪穴住居SI13は形が北陸地方の特徴。間取りは8.0×9.5mを測り、集落内最大。
- ・中台遺跡北辺部の竪穴0106の住居形態も、北陸地方の特徴。竪穴0106も地区内最大規模の竪穴住居。

35

関東から東北へ移住

- ・神奈川県坪の内九門寺遺跡の玉作り工房から新潟の土器が出土。埼玉県霞ヶ関遺跡・千葉県国府関遺跡・南中台(なこんだい)遺跡・中台(なかで)遺跡でも新潟の土器が多数出土。
- ・南中台遺跡は玉作り工房や北陸の土器が多数みつかり、勾玉・管玉生産の拠点だった。
- ・ただし、関東ではよい石材がなく、千葉の成田や群馬の高崎でとれた滑石が利用された。その後、茨城の滑石も利用され、土浦市烏山(うやま)遺跡などでも玉作りが行われた。このようにして、古墳時代前期後半には千葉県小滝(おたき)や福島県建鉾山などで磐クラ祭祀がはじまる。
- ・北部九州の沖ノ島の祭祀に共通する祭祀形態です。
- ・このようにして、近畿の土器や北陸の玉から集団の移住の実態が掴めつつあった。おそらく、鉄器や鏡なども同ルートで流通した。
- ・これらが入の沢遺跡の砦でもみつき、土器は千葉県南部の特徴があり、移住者は安房の人々だった。

36

石巻市新金沼遺跡の衝撃

- それでは、近畿や東海の勢力はなぜ、東北に向かったのか。
- それを示唆する遺跡が宮城県石巻市新金沼遺跡の集落でみつかった。
- 一つの住居の中から近畿の土器と関東の土器と北海道の土器が発見された。
- つまり、交流相手は北海道の人々。
- 宮城・岩手・青森・秋田では、ときおり続縄文土器と呼ばれる最果ての人たちの土器が見つかる。
- 北海道の人々が交流のためにやってきたことを示すもの。
- 近畿の勢力は北海道の人たちとの接触を試みたのではないかと推測。
- 近畿の人たちや東海の人たちが危険を冒してまで求めた北海道の交易品は不明。逆に、北海道は鉄器時代になる。

37

近畿勢力、蝦夷との出会い

石巻市新金沼遺跡



北海道の土器



古墳時代の土器

38

東北出土の北海道の土器



- 福島県いわき市菅俣B・折返A遺跡で近畿の土器と居館
- 福島県浪江町本屋敷古墳群下層から近畿と北陸の土器
- 宮城県名取市野田山遺跡集落で近畿の布留式土器
- 宮城県石巻市新金沼遺跡集落で東海関東の土器と北海道の土器
- 新潟県村上市山元遺跡集落で北陸の土器と北海道の土器

39

東北・北海道の鉄器化



40

5 おわりに

- 宮城県入の沢遺跡は古墳時代前期後半、景行陵古墳や成務陵古墳がつくられていたころの集落。
- この時代のみがヤマトタケルと関わるのではなく、ヤマトの勢力が三世の弥生時代後期後半から北陸・東海・関東へと複雑なルートで交流・進出を続け、四世紀中ごろには東北に至った史実があった。
- ヤマトの勢力は同様に西日本から南九州へも進出する実態もわかっている。
- これらの史実が換骨奪胎され、『古事記』『日本書紀』では一人の英雄の征討物語につくりかえられ、『常陸国風土記』などにも断片的に語り継がれていた。
- さらに検討すべきは、『古事記』と『日本書紀』でヤマトタケルの物語の展開やルートに微妙な違いがあること。
- ここで想起されるのは、来年1300年を迎えて話題になるであろう太安万侶とその墓誌。墓誌には「…従四位下勲五等太朝臣安万侶…」とあった。注目点は「勲五等」。

41

- 諸説あるが、古代においてはおよそ戦争に従軍して功績がないと叙勲されないこと。
- 若い時分、大海人皇子について壬申の乱で功績をあげたにしては、五等の叙勲は高すぎ。つまり、従四位になった晩年の従軍と推定される。
- 太安万侶の従軍に関し、横田健一先生や直木孝次郎先生は養老四年(720年)の隼人征討説、岡田精司先生や黛弘道先生は和銅二年(709年)の蝦夷征討説。蝦夷と隼人の両方とも従軍していたという説も。
- いずれにせよ、『古事記』『日本書紀』の成立前後の大和には征西・東征の従軍者が数多くいたわけで、行軍中の出来事や具体的な地名などを使って作文しやすい環境だった。
- 太安万侶自身がヤマトタケルの気分になって行軍し、熱田神宮に宝剣があること、走水の海峡の波が速いことなどを体験した可能性も。
- 以上は、2023年の没後1300年の記念行事の課題の一つとして、大いに盛り上げることができるだろう。

42